

淡 春

特集 大学院を重点とする大学

[総長対談] ゲスト 吉川弘之 日本学術会議会長

[教育・研究の現場から] 新領域創成科学研究科 / 社会情報研究所

[世界の中の東京大学] UTフォーラム2000イン・ボストン同行記

[サイエンスへの招待] MAPキナーゼ との出会い [キャンパス散歩] キャンパス樹木園2



東京大学広報誌

TANSEI

April, 2000

2

淡青

「淡青」について
東京大学と京都大学(当時は東京帝国大学、京都帝国大学)が1920年に最初の対抗レガッタを瀬田川で行った際、抽選によって決まった色が「淡青(ライト・ブルー)」であり、本学の運動会をはじめスクール・カラーとして親しまれてきました。

本誌創刊号はいかがでしたでしょうか。素人集団がナビゲーターもいないまま、思考の試行錯誤を繰り返しながら企画に没頭しはじめたのは、もう1年も前のことでした。それ以降、学内外の多くの方々から暖かいご援助をいただき、創刊号につづき第2号の刊行にこぎつけることができました。

本号の総長対談は、前総長で日本学術会議会長など幾多の要職につかれ、また本年1月からは国際科学会議会長をもおつとめになっている吉川弘之先生をお迎えし、未来を見つめながら、技術・科学・教育のあるべき姿をめぐって蓮實重彦総長と語り合っていました。

特集として取り上げたのは、「大学院を重点とする大学」です。本学は、他大学に先がけ大学院重点化を果たし、知の探求のレベルアップを目指しています。すべての学部が重点化したのは平成9年のことなので、その評価は時期尚早かもしれませんが、「大学院を重点とする」大学のいくつかの側面を浮かび上げようとしたものです。

創刊号を引き継ぎ、「教育・研究の現場から」『世界中の東京大学』サイエンスへの招待』では本学の教育・研究を紹介し、本学に親しんでいただくための「キャンパス散歩」インフォメーションも引きつづき掲載いたしました。

創刊号に寄せられた多くの激励のメッセージに感謝いたしますとともに、今後とも本誌に対しご意見・ご批判をいただきますよう、よろしく願い申し上げます。

(東京大学広報委員長 大塚柳太郎)

総長対談

ゲスト
吉川弘之
日本学術会議会長

未来を設計するためのシナリオ

新しい動きに対して、高い感受性が必要とされているのではないかと、吉川弘之東京大学前総長をお迎えして語っていただく、技術とは何か、科学とは何か、教育とは何か。



吉川弘之

Hiroyuki Yoshikawa

一九五六年、東京大学工学部卒業。工学博士。科学研究所現・理化学研究所(を経て、一九六六年から本学工学部、一九八九年、工学部長。総長特別補佐を経て、一九九三―一九九七年、東京大学総長。現在は日本学術会議会長、日本学術振興会会長、放送大学学長、また二〇〇〇年より国際科学会議(ICSI)会長。



蓮實重彦

Shigehiko Hasumi

一九六六年、東京大学文学部卒業。大学院人文科学研究科に進むとともに、留学したパリ大学から一九六五年に博士を授与される。帰国後、立教大学を経て一九七一年から本学教養学部、一九九三年、教養学部長。一九九五年、東京大学副学長。一九九七年、東京大学総長。

蓮實 お忙しいところをお越しいただき、ありがとうございます。先生からまずうかがおうと思っております。動燃とこのあいだの東海村の臨界事故です。これらを調査なさった先生として、どのような印象をもたれたのでしょうか、何が問題なのでしょうか。
吉川 いきさつから申しますと、動燃のときに事故調査委員長を引き受けましたのは、動燃というエスタブリッシュした組織の問題でしたから、大学の組織と共通するところがあるわけで、やってもいいかなという気がしたんです。ところが、東海村の臨界事故については、背後にもっと複雑な日本の状況がからんでいる気がしまして、工学を

やっていた私には手に負えないだろうと思いましたが、私は工場での製造技術を専門としていたのですが、とまかく無理だと断ったのです。蓮實 どなたが先生に依頼されたのですか。
吉川 原子力安全委員会の事務局です。結局は引き受けてしまったのですが、そのときに一つ条件をつけました。この事故の原因はたんなる技術の問題ではないので、原子力の専門家はもちろん必要だけでも、品質管理という工場の専門家と、社会学とか経済学、あるいは産業構造の専門家も入れなければできないと言いました。
三つのワーキンググループをつくりました。第一は技術そのものについて、何が起こったのかを

明らかにするためです。第二は、JCOという企業がなぜ事故を起こすに至ったか、企業としてのJCO、その背後にある原子力産業、さらにはより広く製造業の構造を調べようということ。第三は社会という観点です。日本におけるセキユリティがどのように個人に浸透し、あるいはセキユリティが社会的にどう位置づけられているのかを考えると、最初の予測できたのですが、非常に大きな問題すぎて、わずか三カ月では、どこをどう変えればいいのかは、よくわからなかったのです。そこで、いろいろな視点からの提案を列挙することにしました。その結果、百四の提案が最後につくという報告書になったのです。ただ、この報告に意義があったとすれば、一つの事故というものは、けつして単純に起きるのではなく、大きな社会的な背景があるということです。一口で言えば、やはり大きな矛盾を日本社会はかかえているのです。いちばん大きいのは、私たちのもっている技術はまだ未完成というが、効率を上げようとする安全性が下がるという問題です。

蓮實 最初に先生はお断りになったというお話ですけれども、もし先生がなさらなかったとしたら、どういった取り組みがあり得たのでしょうか。
吉川 もし別の委員会があったとしたら、原子力発電を日本で続けられるのか続けられないのかという議論にもなり得たと思います。
蓮實 東大病院で患者さんが亡くなられ、私は武谷雄二病院長と前川和彦主治医に、どのような状況であったのかをうかがいました。いろいろな苦勞なことがあったことですが、私がいちばん驚いたのは、あのレベルの患者さんが三人出たら、日本ではもう対応できないということです。お一人だけで東大病院を総動員したわけですから。

吉川 そうだと思えます。
蓮實 原子力発電を続けていくとすると、そのような体制づくりも必要なのではないでしょうか。



吉川 私たちの調査委員会のミッションは、なぜ事故が起こったかということでしたから、対応の問題については事実を述べるにとどめました。しかし、「指摘の問題は本当に重大です」。

私たちの報告書の中心思想は、絶対に安全ということはありません、リスクマネージメントという考え方に変えなければいけない、事故は起こり得るといふよりは、起こったときの対応を準備する、という論調になっているわけです。先生がご指摘のように、対応という問題は十分に考えなければいけない。もし原子力を続けるならば、その対応の能力が大きく問われるわけです。

ところが、絶対に安全である、事故は起きない、だからレスキュー隊も準備していなければ、防護服すらもなかった。ご指摘のように、患者が出たときの対応もまったくなかったということです。これは日本社会の一種のタブーというか、触れてはいけないことはいつも積み残して、一面だけしか見えないという、大きな欠点だと私ははつきり申し上げたいと思うのです。

欧米諸国では、たとえば青年がアフリカに行っているような協力をするとき、そういう活動をやるのだったら、風土病に罹った人間を治すための病院をつくることから始めようということでしょう。私は、フランスなどではこのような態勢になっていると聞いております。

絶対安全に保護する、だから危険なところに若者は出さない、だから病気になる、だから病院はつからない、という発想でわれわれはやっているような気がするのです。これではリアリティがなく、大きな反省が必要だと思っています。

蓮實 あと一つ私が驚きましたのは、臨界事故が起こったことの最初の発見者は放射線医学の医師で、患者さんを診た段階ですぐにわかったということです。発見されたのが原子力や物理学の専門家ではなかったのです。

それから、日本には臨界事故の経験はまったく

私は設計学という分野もやっていました。この分野の成果を論文にしても、工学論文ではないとすべて断られてしまった。新しいコンセプトというのは大きな抵抗を受ける構造がありますね。

蓮實 日本ではとくにそう思うのですが、社会的なニーズは何かをすぐに問うわけですね。社会的ニーズにしたがっているだけではだめでしょう。必要が発明を生むというコンセプトはもう変えなくてはいいなくて、発明が必要をつくり出すということだと思えます。それには、絶対に今やっておくべきですよという説得が必要でしょう。

ただし、社会がどのように評価してくれるかはむずかしいところだと思います。先生の場合、幸い東京大学には度量の広い先生がいらしたので、活躍の場をおもちになれましたが、そうでなければ浮いてしまうといえますが、窓際に追いやられたのではないですか。

吉川 本当にそう思います。(笑)

タイムラグをもって私の提案は認められませんでした。先生のお言葉を借りれば、最初に説得されたのは通産省の担当官でした。メンテナン・ロボットにしても、五年ぐらいして、彼らがメンテナン・ロボットのプロジェクトをつくらうと言ってくれたわけです。それだけの感覚をきちっともっている人たちの集団だったと思います。

先生の言葉に触発されてお話しするのですが、私は最近、説得というか、シナリオというものが大事だと考えるようになりました。もともと技術開発のなかにもシナリオという概念があります。しかし、それとは別に、社会がどうなるかについての一種のモデルを、常時議論していなければいけないと思うのです。

いまみえているニーズにしたがっているだけではなく、将来どうなるかというシナリオが重要です。これは現代の科学では証明できないんです。考えてみれば、私はこういうことを言っていたんです。メンテナン・ロボットにしても、シナリ

なかったので、ロシア、フランス、アメリカから専門家呼びました。彼らが診ると、その患者さんの状態がすぐにわかってしまったのです。そのノウハウが日本になかったことは、今後変えないといけないと思うんです。

吉川 そのとおりです。

蓮實 東大病院は必死に対応されたわけですから、本質的なノウハウがなければならぬということです。先生がおっしゃったように、事件が起こってから次々に対応するわけですが、それが活かされるためには、今後どうするかですね。

技術・科学の社会性

吉川 本当にそう思います。一口でいってしまえば、原子力技術は輸入の技術なのです。原子力の利用は、マリー・キュリーのラジウムの発見に始まるわけですが、放射能障害を経験しながらやってきました。臨界事故もアメリカとかほかの国々で起こっているわけです。小さな事故を起こしながら、ノウハウを積み上げてきたわけです。

しかし、日本ではそういうものをすべて忘れてしまっていて、理論としては理解しドキュメントとしては残っていても、実感としては何もありません、完成した技術として取り入れたわけです。

蓮實 吉川先生は一九六〇年代から無人化工場というアイデアを出され、事故が起こった場合の機械そのものの自己修正ということを言っていて、今の状況を予言していたのではないかと思っています。

吉川 そういえるかもしれませんが、懸念に考えていました。生産性向上とか、品質の高いものをつくることと同時に、どんなに理想的なものをつくっても壊れるのだから、メンテナン・直す、修理を忘れてはいけないことに思い至

るわけです。そこでメンテナン工学を提唱しました。一九七三年ころに私は原子力発電所にアクセスし、メンテナン・ロボットを導入しなければいけないと提案するわけです。数人の若い仲間との共同研究でロボットを一台つくりました。原子力発電所の階段を昇り降りできるメンテナン・ロボットが、事故が起こったときに作動するので、危険は一桁下がるといったわけです。

しかし、このような発想が受け入れられたのは最近です。私も現場に行つて故障のデータを集め、故障とは何かを考えたいわけでしょう。ところが、現実にはいっぱい故障しているのに、うちの製品は故障しないというわけです。故障しない建前ですから、故障を研究するのはやめてくれという時代でした。それで、理論研究というところからはいいのですが、私の研究は現場のデータなしの論理的なものになってしまっています。

技術を進展させる社会的責任というか、社会の構造が一方的で不十分だと感じていました。最近になって環境問題が起こってきて、機械というものが存在するのだったら、それがどう壊れていくのか、直すのはどうするのか、廃棄はどうするのかに、ようやく目が向いてきたわけです。

蓮實 当然起こるであろう、起こっておかしくないであろう事故への対応を、先生は三十年前にお考えになったわけです。そのころに外部評価を受けたとしたら、先生のお仕事はどう採点されたと思いますか。当時は、社会的なニーズはなしと言われたわけですね。

吉川 なしと言われた以上に、そんなことを話題にしてくれるなというムードでした。そういう意味では東京大学はいいところで、私たちのプロジェクトを認めてくれました。これは、大学のもつ大きな潜在的な能力だと思えます。ただ問題は、そういった大学の研究を社会に提案する仕組みあるいは社会が大学の研究の知恵を吸収する仕組みが皆無だったことです。

才づくりこそが大事だということです。必要なのは現実のニーズではなく、シナリオを描ける能力で、それは工学とか自然科学の世界より、むしろ文学的なものなかもしれません。ある意味では科学的な研究能力とは違う能力が、科学研究にも必要になってきたといえると思います。

時間という概念の導入

蓮實 先生がなさったお仕事が認められてくるのは、そこに時間という関数を導入なさったからだと思います。時間という要素を組み込む必要性は容易に説得できないわけですね。先ほどのお話でも確実な答えはなく、予測になるわけです。そうなりますと、必要なのは賭けの精神みたいなもので、こうなります、ただしならないかもしれないけれども、なる可能性は大きいということでしょう。この精神を、大学なり知的な社会がもう少し取り込まなければいけないと思うのです。時間という概念を入れるというのは、生命の論理ですね。十九世紀の大学では、物理学にしろ数学にしろ、空間のなかに真理があればいいということ。そのころにも生命現象にかかわった学者がいたわけですが、生命という言葉がつかわれると、なぜか科学の世界ではうさん臭いとみなされていきました。

吉川 その時間という問題について、私は入り口に立っているにすぎないのですが、先生がご指摘のように、何かそこに新しい突破口があるのではないかと、何かそこは直感的に強く感じます。もちろん、物理学にも時間という概念があります。しかし、ニュートン力学の時間とは違う時間が必要なんですね。

話がちょっと飛躍して恐縮ですが、私がいま興味をもっていることがあります。それは、環境問題をどのような学問として扱えるかと、もう一つは教育問題です。私が三年前に学術会議で、この

科学の向かう道

蓮實 外国で先生の話になったとき、ホーリズムの吉川だな」とある研究者が言われました。先生は、日本というかアジア地域から始めて、世界の学問をリードするICSSU(国際科学会議)の会長に今年からなされました。二十世紀の日本社会あるいは日本の大学にみられた限界を超えるには、ホーリズム的な考え方の導入が必要なのではないでしょうか。

吉川 そうですね。私は最も大きな課題であろうと考えようになりました。学問領域をつくったことは近代における発明として大成功しました。専門家をづくり、専門職業家をつくり、これらの人びとが分担して社会システムをつくることで、知識の領域化は大成功しているわけです。しかしながら、新しく起こってきた環境問題とかあるいは教育問題への取り組みをむずかしくしている原因にもなっていると思うのです。

ホーリズムというのかインテグレーションというのかわかりませんが、異なる領域をつなげる方法論をわれわれはもっていなかったのです。これはむずかしいのですが、本当に必要です。先ほど申し上げた教育と環境も、まったく違う視点でインテグレーションしてみると、われわれの知らない時間というものがある学問体系が生まれるのではないかと期待しています。

蓮實 おそらく、個々の現場で頑張っておられる方々の多くは、そんなことは必要ないと反応されると思います。したがって、われわれが直面している問題を、たとえば十年後、二十年後に考えてみた場合、現在のように分かれていたのはいけませんよという、一種の予言的なものを強調しないと、なかなか説得できないと思うのです。

吉川 そのとおりです。分かれていることが悪いということを実証するのはほとんど不可能です。蓮實 そこで、だれが賭けの担い手になるかとい

二つは学問的な見地から共通点があるのではないかとという問題提起をして、一つの研究グループがつくられました。その研究グループには、環境問題が起こってきたのも、教室の荒廃とか学力の低下といった教育問題も同根ではないか、したがって、ライフスタイルとか価値意識を変えることをとおして、環境問題も教育問題も解決できるモデルをおつくりいただいています。

教育とは何かと考えますと、まさに時間に関係しています。その本質は、未来の人間と一緒に仕事をしなければならぬということ。もう少し狭い意味でいえば、前の世代の先生たちが教えるわけですが、教えるというのはある意味ではおかしなわけで、これから生まれてくる人間も含めた一種の共同作業であるべきです。

環境問題も同じで、たとえば私たちの世代が石油を使い切ってしまう、つけが将来に回るといふことです。経過する時間が重大な軸になっており、ニュートン型の研究スタイルが適用できない二大課題ではないかという気がしています。

蓮實 先生がおっしゃったことは、まさにそのとおりだと思います。

そのときに、もう一つ必要なと私が常に思っていることがあります。それはフロイト的な精神分析の視点です。人間には死への本能というものがある一方にあり、またコンサーションの本能もあって、その葛藤が起こっているわけですが、教育というのはこのことと関係があるのではないかと、いうことです。

環境問題にしても、われわれが生き延びるために必要な正論をいくら述べても、それに対するレジスタンスがいたるところにあるわけです。日本の大学、ことによるとアジアの大学全体がかもしれませんが、フロイトの定着率は低いんですね。そのあたりを先生はどうお考えになりますか。

吉川 教育についていえば、社会的に成熟した教育とはいったい何なのか、わからなくなることが

うことだと思つのです。

ところで、このような話に対し一般に出てくる反応は、独創的になれということ。しかし、これはまちがっていると思います。どういう人物を生めば、未来に対するシナリオづくり、設計、賭けといったことが自由に行えるかを考えなくてはいけないわけですが、独創的になれという言葉だけでは絶対だめだと思つのです。

吉川 本当に賛成で、独創的になれという言葉はむなしく感じます。そこには内容がないことが多いというか、問題はもっと現実的なのです。

現在の科学者の状況を見ると、二極化現象が起こっているのです。一つは、簡単な言い方をすれば、物事を知りたいという知的好奇心に基づいており、真理を解明することによって明らかにされる知識の体系を人類の宝物とする研究者です。

もう一方で、ICSSUのような組織のなかで気づくのは、環境問題、たとえば砂漠化の進行という現象に対し、このままでは人類が危険だというシナリオ性をもつ研究者たちの存在です。こういう問題に、もともと物質の研究者と同じような視点をもっていた海洋学者、地質学者、気象学者などが結集し、何々のための科学と言つようになったのです。

ICSSUとユネスコによる最近の声明は、知識のための科学、平和のための科学、開発のための科学、社会のための科学という四つの章にわかれており、何々のための「がない科学はないんです。知識のための科学もその一つになってはいけません。知識は情報ではなく人間が利用する対象になっています。科学はその応用を考えなければいけないというわけです。現実的な状況が科学の世界にどんどんはいりこみ、科学もそれに応じて動いているなかで、独創的などといっている暇はないんです。科学者自身が、新しい動きに高い感受性をもつていなければいけないと思つのです。

このような流れのなかで、科学が分裂している

いっぱいあります。私は、この問題がはつきりと現れたのは大学紛争と思つています。しかし、精神的にはまったく整理されないままに葬り去られたわけです。フロイトの言うリビドーといったものが介在したところから出てくる問題提起は、表面的なしつけとか倫理のなかに隠されたわけでしょう。この問題が、大学紛争としてしか噴出したのは不幸なことかもしれません。しかし、ある意味ではものすごい可能性をもっていたと思います。それを整理できない限界について、私は一種の挫折と感ずるのです。

蓮實 あのころ教師と学生の間で、いろいろな葛藤がありました。先生は挫折という言葉をつかわれましたが、頓挫させた主体は何だったのがか気になっています。全共闘の学生が無意識にやったことを意識的に構造化して、その意味をとりあげるのは次の世代でなければいけないと思つのです。ところが、整理をしないまま、なかつたことにしようというのは、日本社会のトラウマだと思つています。

教育は、あのような出来事が、潜在的にいつ起こってもおかしくはないことを前提にしないといけないと思つのです。

吉川 私もそう思います。大賛成です。蓮實 ああいう形をとるかどうかはともかく、押しつけられるというようなことは、本来の教育ではないと思つのです。

吉川 そうですね。先ほど挫折と申しあげましたが、責任感といったほうがいいかもしれません。問題提起はわれわれではなく、全共闘を中心に出てきたわけですが、次世代に伝えることができないうという焦りのようなものを感じます。

蓮實 それから、あのころはよかつたというノスタルジーのようなものだけが残つても、それでは仕方がないわけです。(笑)

吉川 本当にそのとおりです。今の大学にどう影響しているかを常に考えるべきでしょうね。

ことは危機的です。問題は、俯瞰的な見方に関係するのですが、科学の全体の状況をだれかが見定めていないと、妙な対立が進むことになります。蓮實 おっしゃるとおりです。先生は東大総長日本学術会議会長、日本学術振興会会長、そしてICSSUの会長をなさり、そういう時期にきていると警鐘を鳴らしつつおられるわけですね。

吉川 そうかもしれません。蓮實 私も先生と同じように考えていますが、まったく自分の関心だけでやっている研究者にも、彼らの可能性に対し投資しなければいけないと思つのです。

吉川 そうです。蓮實 政治家や行政官は、なかなかそうはしないでしょう。俯瞰的に見て重要な科学は絶対に必要だけれども、それに関心を示さない研究者に対する投資も考えなければいけないわけです。ぶつたにいわれている言葉では、基礎科学の研究者に対してです。二極化のなかで、一方はいらないとはいえないでしょう。

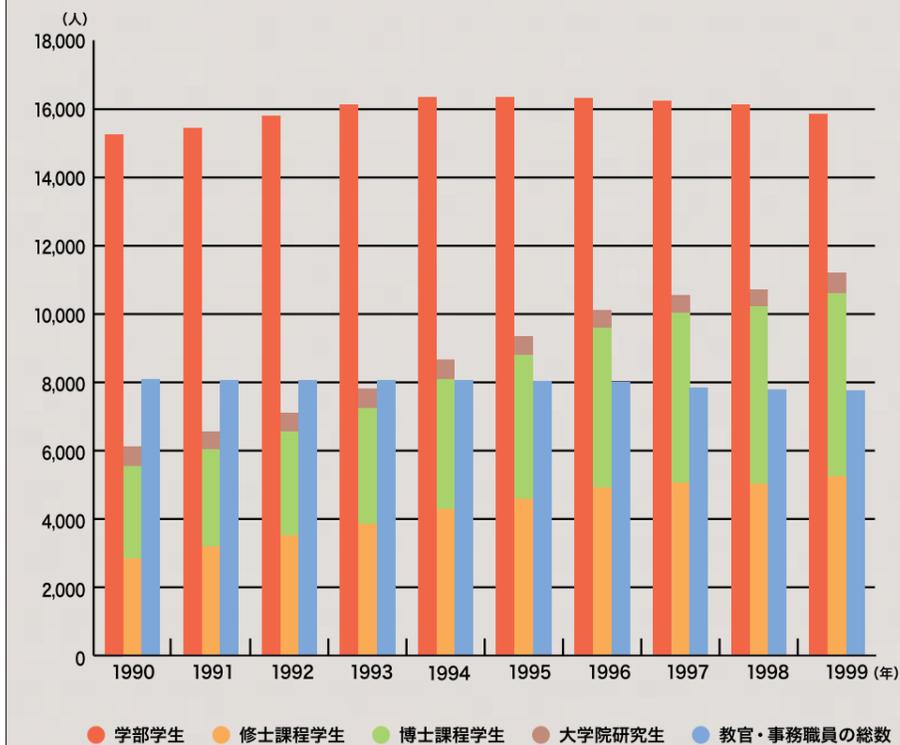
吉川 それはいえません。蓮實 ですから、私たちはさまざまな基礎研究を大学という組織で保証しなければならぬわけで、独立行政法人はこの点からは危ういということになります。

吉川 私は、分極化している状況は危機的だと申しあげました。しかし、それは二つに分かれていくことに気づかないで、科学が一般の人に対してばらばらの印象を与えていること、たとえば一般社会の学問に対する投資の動機を失わせるという意味で危険だということ。両方の科学ともまちがいなく不可欠です。独立行政法人はやっぱり危ないことになりますね。(笑)

蓮實 長いことありがとうございます。吉川 どうも失礼いたしました。

(二二) 年一月二三日

【図1】学部学生、修士課程学生、博士課程学生、大学院研究生、教官・事務職員の総数の推移



目で見る 東京大学

東京大学は、新しい世紀に向けてさらなる進化を目指している。この一〇年間の変貌を、さまざまな統計から振り返り、課題をも浮き彫りにする。

東京大学は、学部および大学院の学生数、教職員の数が増えつつも、国立大学である。現在、学部数は一、大学院研究科の数は二二。さらに本年四月から情報学環・学際情報学府という新しい組織も加わった。それだけでなく、本学には附置研究所・研究センターが数多くあり、先端的な研究を進めているだけでなく、スタッフは関連する研究科を併任し大学院教育に欠かせない存在となっている。二二の研究科のそれぞれは、右頁にみられるように、本学が三極構造と呼んでいる、本郷、駒場、柏のキャンパスのどこかを拠点にしている。ただし、平成一一年度から学生を迎えた新領域創成科学研究科は、柏キャンパスの完成まで本郷キャンパスで教育研究を行うことになっている。

大学院重点化は、本学の教育研究にさまざまな変化を引き起こしつつある。それはなんといっても、大学院という高度な教育の場の拡張であるが、新領域創成科学研究科の誕生に象徴されるように、質的な変化をも内包している。ここで注意しておきたいのは、大学院重点化といっても、本学は学部前期課程の教養リベラル・アーツ教育はむしろ学部後期課程の専門教育をも充実させ、大学院教育と連動させる道を選択した点にある。

本特集のテーマ、「大学院を重点とする大学」を目に見える形で紹介しよう。図1は、本学の構成員である学部学生、大学院学生、大学院研究生、さらには法学政治学研究科専修コースの学生数と、教官・事務職員数の変

遷を示している。大学院重点化が法学部ではじまったのが平成四(一九九二)年だったが、一九九一年からの推移をたどることになった。この一年間、本学では学部学生が微増から微減に転じているなかで、大学院学生は倍増した。四年前には一五パーセントであった学部学生に対する大学院学生の比率は、一九九一年の三六パーセントから一九九九年の六七パーセントへと急接近している。

修士課程学生と博士課程学生の増加率は、ほぼ近似している。しかし、修士課程の標準的な在学年数は二年、博士課程のそれは三年である。また、医学系研究科(健康科学・看護学専攻と国際保健学専攻を除く)の各専攻と、農学生命科学研究科の獣医学専攻は、修士課程は四年制の博士課程だけをもってしている。したがって、大学院の入学者総数は、修士課程に対し博士課程は六パーセント強であるにもかかわらず、在籍数ではかなり接近している。なお、初期に微増した学部学生数は、ベビー・ブームへの対応でなされた臨時増募の影響が大きい。一九九五年から減少しているのは、この臨時増募を徐々に解消してきたからである。

教官・事務職員数は減少傾向にある。この多くは事務職員にみられており、教官数は若干増加した。とくに教授および助教授が増加している。とはいっても、大学院学生数が急増するなかで、教官一人あたりの大学院学生数は、一九九一年に一・四人、一九九九年には二・六人になっている。

大学院

特集

を重点とする大学

本郷キャンパス

- 人文社会系研究科
- 教育学研究科
- 法学政治学研究科
- 経済学研究科
- 理学系研究科

- 工学系研究科
- 農学生命科学研究科
- 医学系研究科
- 薬学系研究科

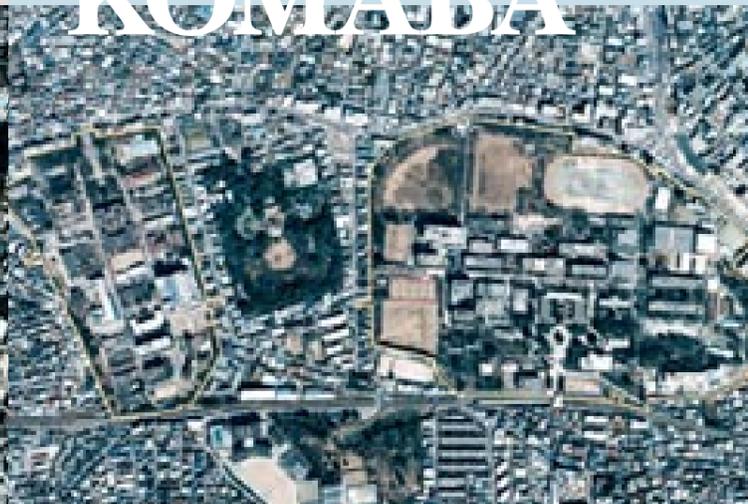
HONGO



駒場キャンパス

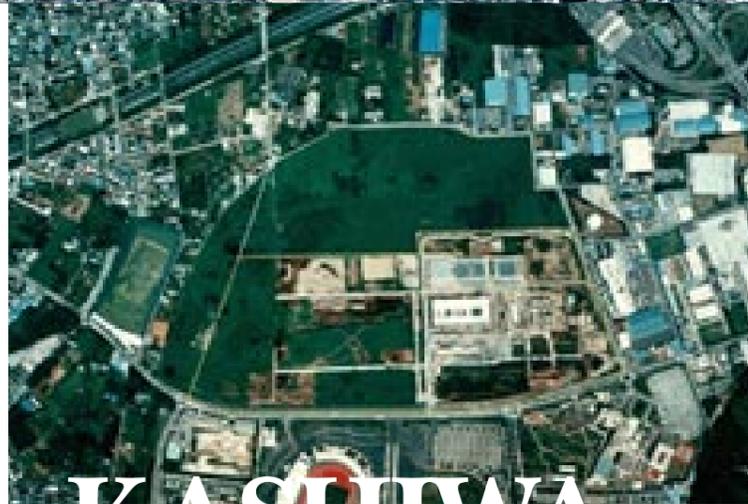
- 総合文化研究科
- 数理科学研究科

KOMABA



KASHIWA

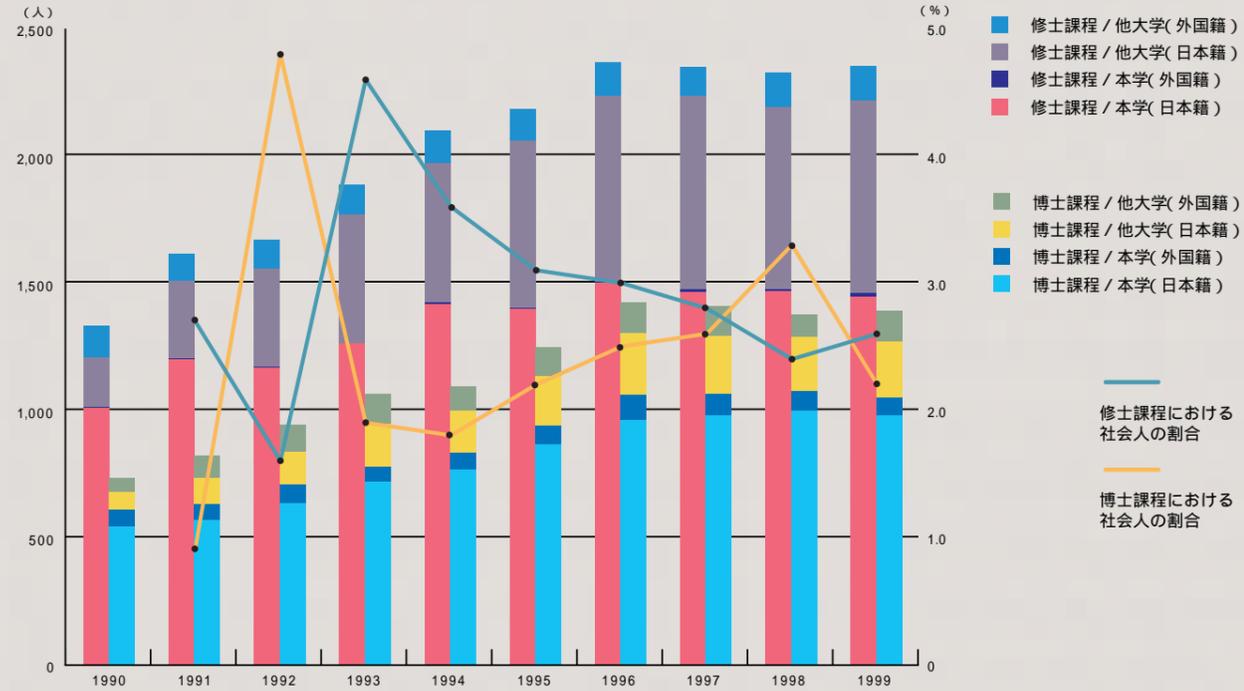
柏キャンパス
新領域創成科学研究科



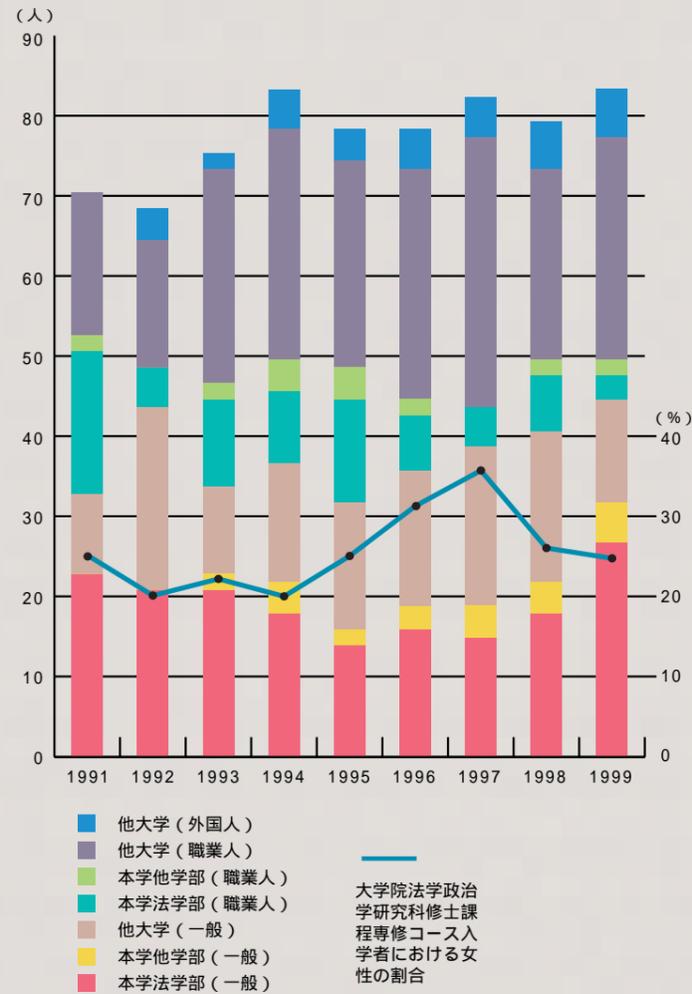
本学では、平成3年4月に法学部が大学院法学政治学研究科に改組したのを皮切りに、平成9年4月からすべての学部で大学院が重点化されました。大学院重点化とともに起こった変化は多様で、これからは多くの変化を推し進めていくことになるでしょう。その初期の段階にある私どもの素顔の一端を紹介します。

まずは本学の構成員の変遷を追い、さまざまなキャリアをもつ大学院や専修コースの学生たちが、どのような教育を受け、どのような研究をし、そしていかに暮らし何を考えているのかを取り上げました。また、大学院学生だけでなく学部学生を教育し、自らも一線の研究を行う教官は、どのように時間を過ごしているのかも紹介します。

【図5】修士課程学生、博士課程学生の出身および社会人の割合



【図6】大学院法学政治学研究科修士課程専修コース入学者数および女性の割合



者では、本学出身者が多いとはいえ、重点化の進行とともに他大学出身者が急増し、最近では約四割を占めている。外国籍で他大学出身とは、ほとんどが母国の大学を卒業した学生である。

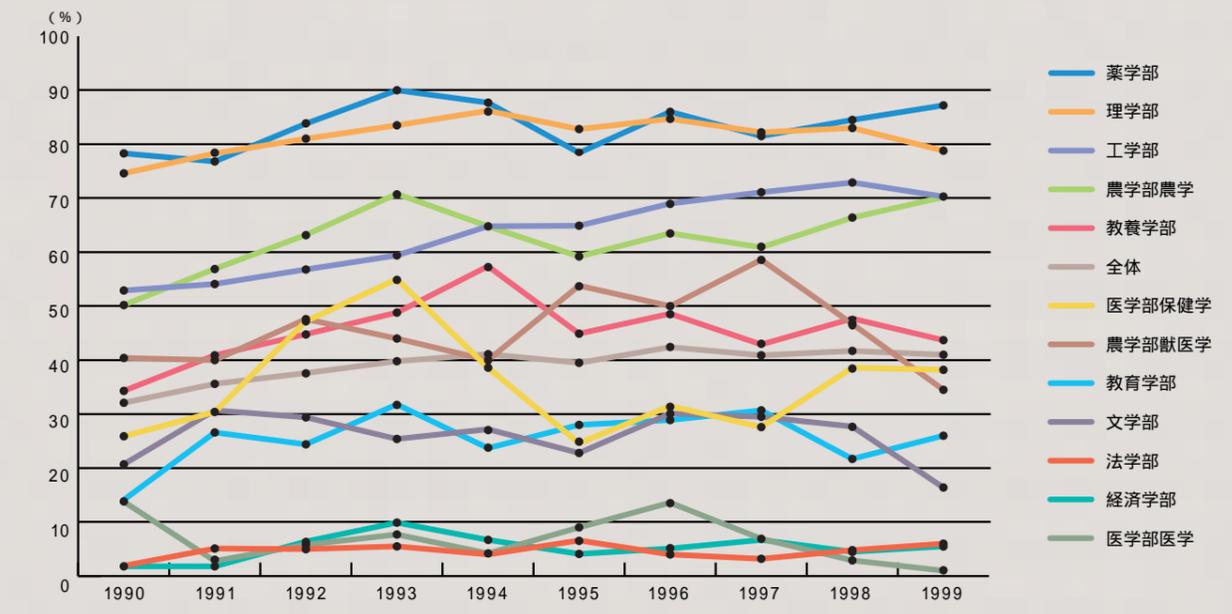
博士課程には修士課程から進学するケースが多いので、日本国籍あるいは外国籍を問わず、本学出身者が多いのは当然であろう。それでも、他大学出身者の割合は重点化とともに上昇傾向にある。

図5には、大学院学生に占める社会人の割合も示されている。この割合は、一九九二～九三年頃がピークのようにみえる。ただし、社会人の割合自体がきわめて小さいので、偶然変動と捉えるべきかもしれない。むしろ問

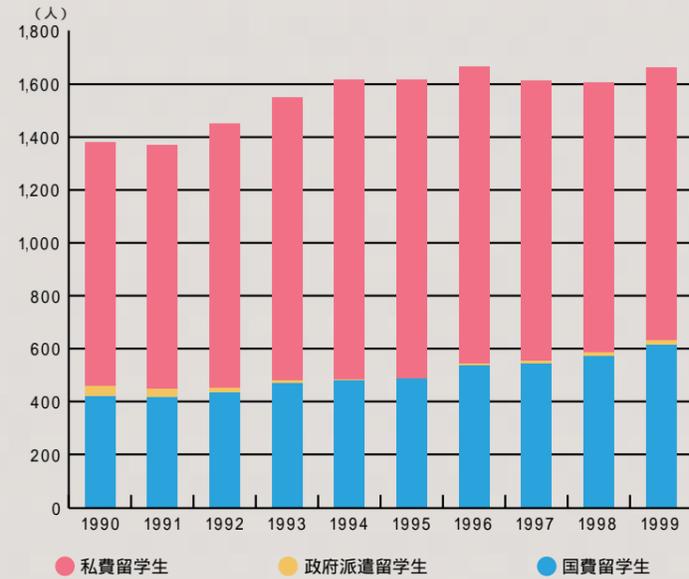
題は、社会人学生が今後増加するか否かである。

図6は、法学政治学研究科の専修コースの入学者を、本学法学部、本学他学部、他大学という三カテゴリーと、さらに外国籍、職業人、そのほか一般と表記の三カテゴリーにわけた。本学法学部出身者の占める割合は約二五パーセントであり、職業人および一般の他大学出身者が半数前後を占めている。職業をもっている学生が、半数あるいはそれ以上を占めていることも特徴で、このコースの設置目的にかなっている。なお、このコースの入学試験では、外国人、職業人一般に対し、それぞれ別のシステムで選抜していることが、このような状況をもたらしている。

【図2】学部別の大学院進学率



【図3】大学院留学生数の推移



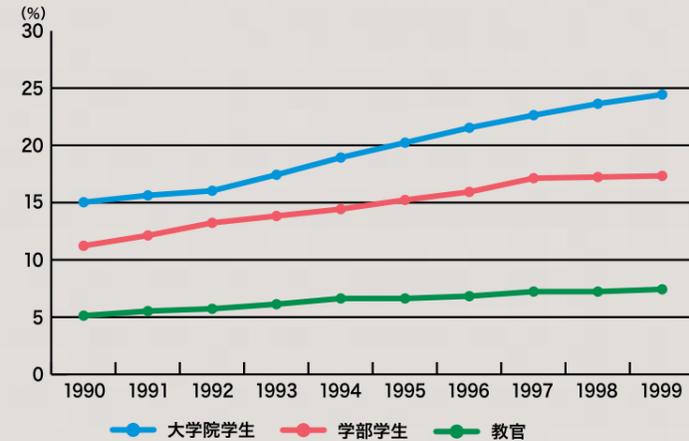
修士課程進学率を学部別にみると(図2)、五～六パーセント程度の法学部・経済学部、ほぼ二〇パーセントの文学部・教育学部、七〇～八〇パーセントの理系学部という、はっきりした違いが浮かび上がる。文系の学部で低いのは、大学院に進学するのが研究者を志望する者にほぼ限られているためだが、法学政治学研究科では専修コースができたことにより大学院の機能も変わりつつある。これに対し、理系の学部では大学院に進学するのは「ふつうのこと」になりつつある。医学部(医学科)で比率が低いのは、卒業すると同時に研修医になるからで、その後の大学院進学率は七パーセント程度である。

大学院留学生は、この一年間微増している(図3)。私費留学生在が高比率で存在するが、東京は家賃をはじめとする生活費が高いこと、そして残念なことに学費が不足していることが、留学生のさらなる増加の大きな制約になっている。

図4は、学部学生、大学院学生、教員別の女性の割合を示している。この割合はすべてで上昇しているが、大学院学生でとくに著しい。とはいっても、やっと二五パーセントである。この図は、女性教官がいかに少ないかも示している。

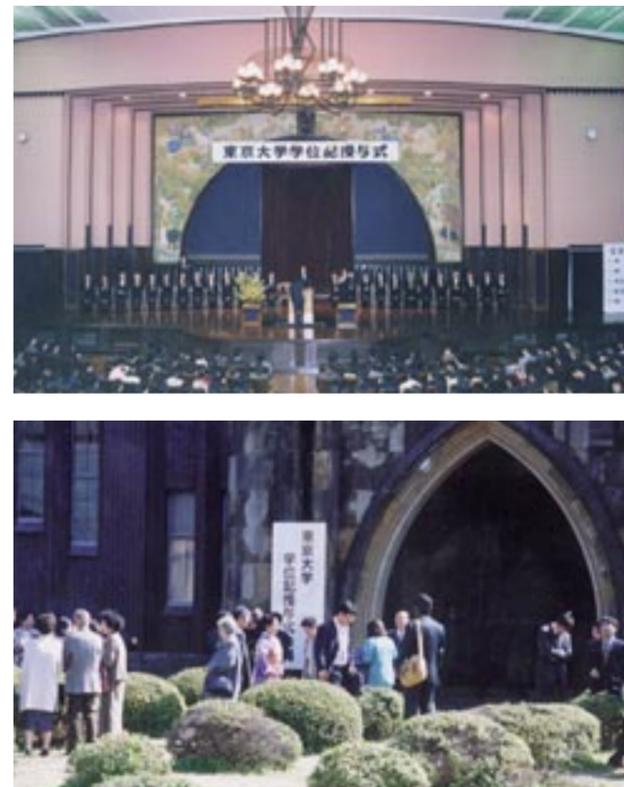
大学院修士課程と博士課程に入学した学生について、出身別に示したのが図5である。ここでは、日本国籍か外国籍か、そして本学出身か他大学出身かにつけた。修士課程入学

【図4】学部学生・大学院学生・教員別の女性割合



大学院大学の の主人公

大学院への進学、そして卒業後の就職あるいは研究者への道。学生たちは自分の好きな学門をきわめる夢をいだきながら、今そこにある現実と直面する。彼らにとっての夢と現実、そして大学院とは。



司会 学生が重点化された大学院をどのよう
にみているかを知るために、立場のちがう二
人の学生に参加してもらいました。博士課程
と修士課程、理科系と文科系、男性と女性
企業とアカデミアへの就職希望といったちが
いがあります。まず、自分が大学院へ進学し
た理由、そして自分のキャリア・パスの中で
大学院をどのように位置づけているのか、と
いうところから話していただきましょう。

司会 お二人とも大学院への進学は、自然の
流れだったということですが、柴田くんの場合
には、いつ頃、またどういう理由で就職を
考えたのですか。

柴田 これは理系に共通した傾向ですが、ま
ず大学院に行かなければ何も始まらない。研
究者になるにしても、企業に就職するに
しても、大学院に行くというのは当然のことであ
るとい意識が強くありました。

柴田 両方の可能性を考えていたので、修士
課程で適性をみきわめようと思っていまし
た。一年生の二月頃、就職について考える
ようになり、準備を始めました。僕は遅かつ
たほうです。大学の研究の世界というのは、
僕が想像していた以上に孤独な世界で、ちょ
っと厳しいなという印象があり、一方でチー
ム・プロジェクトを運営していくことにすこ
く興味がありました。

木谷 今は博士課程にいますが、学部から大
学院に上がるところで美術史から日本文学に
専攻を変えています。希望としては研究者に
なりたいため、修士課程から博士課程へ、自
然に上がってきたと考えています。

司会 木谷さんは、将来大学の研究者になる
うとしているわけですが、そういう孤
独さみたいなものは感じますか。
木谷 ええ、それは感じますが、個人的には
そのほうがあっていきます。(笑)

柴田 大学院工学系研究科
応用化学専攻修士課程2年

司会 それでは実際に大学院に進学して
研究者になるうということに対する大きな障害
として感じたことはありますか。

柴田 それは感じました。博士課程を出ても
一人前になるのに長い時間がかかる。長くて
も期間がわかっていけばいいのですが、たと
えばいつ助手になれるかわからない。しかも
それが自分の実力だけではなく、周りのポス
トの状況にもよるとい、やはり不確定で、
僕には障害に思えました。

司会 木谷さんは、博士課程までいく選択を
していますが、それに伴う経済的な問題、そ
して将来の研究者としてのポストの問題、そ
れはどのように考えますか。

木谷 修士課程にはいってからは育英会の奨
学金とアルバイトで、学費、交通費や本代な
どは何とかしてきました。奨学金もアカデミ
ックな研究職につけば返さなくてすみます
が、在学期間が終わって何年以内に就職
しないといけないとか、いろいろ規定が厳し
いですよね。女性の場合、すごく優秀な方で

木谷 そうですね。たえば非常勤講師では返
さなくてはいけません。好んで非常勤
になっていくわけでは全然なくて(笑)、不
運にも決まらないで、経済的に苦労してい
る人に限って返さなくてはいけないのが、すこ
くわかりにくい思いです。

コメント

大学院とは自分を発見する場

大学院医学系研究科内科学専攻博士課程2年
萩原清文さん

臨床医学系の大学院生は、外来通院患者さんや入院患者さんを担当しながら研究をすすめています。患者さんに接することで病態の解明や治療の開発に対する動機を高めるわけです。診療しながらの研究ですので、どうしても時間的制約があることはやむを得ません。しかし、純粋な基礎医学の研究とはまた一風ちがった、臨床医ならではのセンスや技術を生かした研究というものはあるはずで、それを理想として励んでいます。大学院に入ったとき、『大学院とは自分を発見する場である』と、学生時代の恩師の多田富雄先生から励ましの言葉を頂きました。診療と研究の間を右往左往しながらも、自分が今後何を求めているかを発見する場として、残る大学院生活を最大限に生かしたいと思っています。

(はぎわら・きよふみ)

も結婚して子どもを産むと就職がない。子どもを産むか産まないかというのは自分でもまだよくわかっていないのですが、就職できないければ、奨学金を返さなければいけない可能性が高いわけですから不安があります。司会 確かに育英会の奨学金の場合には免除職があつて、そこへ就職すれば返さなくて済むけれども、いろんな制約条件があるわけですよ。私の例をいいますと、育英会の奨学金をもらって博士課程を出て、教育職について、ずっとアメリカにいたわけです。そうすると返さないといけない。アメリカはドルですからどうにか返せませんが、たとえば途上国に行つて教育をやるうと情熱に燃え、現地通貨で給料を受け取るとする。そこで暮らすには十分であつても、日本に送って返済するのはほとんど不可能です。日本が途上国の問題を考え、若い人たちが貢献していくためには、もう少し制度面での見直しが必要。また、高額な奨学金を受けても、うまく就職が見つからないうちに返しはじめないといけないとしたら、これはリスクの大きい投資をしているということになります。

木谷 そうです。たえば非常勤講師では返さなくてはいけません。好んで非常勤になっていくわけでは全然なくて(笑)、不運にも決まらないで、経済的に苦労している人に限って返さなくてはいけないのが、すごくわかりにくい思いです。司会 話はかわりますが、もしも自分が大学院を担当する先生だったら、こうしたいという思いはありますか。柴田 僕が今とつている講義の中に、プレゼンテーション形式の授業があるのですが、理系の枠にとらわれず、プレゼンテーション・テクニク、リポート・テクニク、リポート・テクニクを磨こうというもので、

従来の大学教育に欠けていたものとは何なのか。法学政治学
研究科に「専修コース」が開設されて一〇年。外国人を含
め、さまざまな社会人が学ぶ「知的交流空間」の可能性。

職場から大学院へ
大学院法学政治学研究科専修コース

「従来の学部教育とこれまでのような職場での非体系的な知識と経験の蓄積だけで本当に充分なのか」 こうした想いから、法学政治学研究科に「専修コース」が開設されて一〇年を迎えた。このコースの入学試験には、一般選抜・外国人選抜のほか職業人選抜の力テゴリーがある。企業から派遣されたOBの方々に、学生生活を振り返ってもらった。

佐々木 まずは、どのような動機で専修コースに入学されたのでしょうか。

石飛 人事部に勤務するうち労働法に興味を感じはじめ、学部時代には資格試験や卒業のための勉強だけしかしていませんでした。から、いっぺん掘り下げて勉強してみたいということになりました。

福田 上司が薦めてくれました。企業不祥事が頻発したことで、また国際化の問題もありまして、自分のリーガル・マインドに根ざして判断することが大事だと考えるようになり、原理原則を学びたいと思いました。

社会人学生、留学生にとつての大学院

大学院を重点とする大学

う癖を、初心に戻ってやるうとしていたのかなという気がします。

佐々木 このコースをつくって一〇年になりましたが、司法試験予備校的なものはなかった、また、今まで大学になかった知的交流空間というものができたと思っています。こういった雰囲気について、どんなふうにお感じになりましたか。

石飛 まさに人種の坩堝のような環境が、エキサイティングな勉強の環境をつくっているのではないかと思います。

福田 いろいろなどころから専門的な知識や、あるいはちがった興味をもって集まってきた人が、会社に帰ってからもメールをいただいたり、オフィスに遊びにきていただいたりして、交流がつついています。

東京大学で学ぶ大学院留学生は一六〇〇人を超える。将来、コスモポリタンとしての活躍が期待される若者が、どのような思いでどのような留学生生活を送っているのか。そして、その障害とは。

東京大学で世界の各国から勉強をするためにきている大学院留学生は、一六〇〇人を超えており、キャンパスのなかでもよく見かける。これらの外国人大学院生がどのような思いでどのような留学生生活を送っているのでしょうか。韓国からの金さん、オーストラリアからのラクエルさん、マケドニアからのネダさん、そして台湾からの私塾は、それぞれのアイデンティティ、留学経験をもって、寒い午後に熱く語りあった。

日本史学を専攻する博士課程二年の金さんは、自国の修士号をもっているが、自分の分野が日本に深い関係があるため、日本にきて

梅谷 学問的にも、海外のロー・スクールと比べてレベルが高いのではないかと思いますね。ロー・スクールというのは、日本の学部教育より少しむずかしいレベルのカリキュラムで、専門を深く掘り下げるわけではない。私の会社からも数多くロー・スクールへ留学しましたが、よいことといえばニューヨーク州の弁護士資格が取れるということでしょうか。

佐々木 そうですね。司法試験などの制度が変われば、また対応しなくてはいけないことになるかもしれませんが、少なくとも、質的にいい人が集まるようなかたちで、こういった空間を維持・充実していきたいと思えます。今日は、どうもありがとうございました。

佐々木 それでは、司法試験などの制度が変われば、また対応しなくてはいけないことになるかもしれませんが、少なくとも、質的にいい人が集まるようなかたちで、こういった空間を維持・充実していきたいと思えます。今日は、どうもありがとうございました。

修士課程から勉強し直している。

比較文化を専攻している修士課程二年のラクエルさんは、高校から日本語を勉強し、大学に在学中に交換留学生として東大にきた経験があるため、日本近代文学専攻の道を選んだ。彼女は、卒業後には日本で就職したいと考えている。

ネダさんは、NGOで三年間日本人の同僚と一緒に仕事をした経験から日本に素晴らしい印象をもち、昨年四月に薬学系研究科に入学した。彼女は、自分の国からの留学生が少ないため、自国の外交イメージに気をつけている。

佐々木 入学してみても、なにか印象に残ったことはありますか。

福田 最初のうち何を着ているのかわからない(笑)。長年サラリーマンをやっていますと、外出時はネクタイをするものですし。授業の進め方や先生方との接し方など、わからないことばかりでした。ただ、ゼミが始まると、実務の場ではどうかといった話をする機会を与えていただき、すくなくじめました。

梅谷 専修コースの学生には四つの層があると思います。学部から直接進学してきた人たち、官公庁からきた人たち、留学生、そしてわれわれのように企業派遣や実務家の人たちです。私の専攻分野では、弁理士や弁護士、特許庁の審査官などがいらして、なまの実務感覚に触れることができました。また、学部からきた学生は理屈で押しつけてくるわけ(笑)、それともまた昔の自分を見るようで新鮮でした。

佐々木 リサーチ・ペーパーのテーマはどのように選ばれましたか。

梅谷 入学時に出した研究計画のテーマではなかったんです。実際に大学院にはいって、この分野が少し見えてきた一年目の冬学期にテーマを決めました。

石飛 私の場合、よくあるように学書が書かれているようなテーマをなぞってもしようがないので、今までに触れられていないものということで選びました。

佐々木 専修コースで学ばれたことは、現在どんなふうに使われているのでしょうか。

石飛 人事制度を抜本的に改正するプロジェクトに携わっているのですが、大学院で学んだ「最高裁判例と行政解釈だけをみておけばいい」というものではない」という確信をもって、作業に取り組みました。

福田 今までは、業務の中で法律的なことに私は、自分の専門分野に日本に留学した学者が少ないことが気にかかり、日本との学術交流を深めたいため修士課程にはいった。これらの留学生が何も知らずに日本の社会にやってきて、銀行口座の開設、公共料金の支払いはもちろん、電車の乗り換えさえも他人の援助が必要であった。日本にきたばかりのころ、日本語でうまく自分の意思を表明したいときにチャーターに助けられた。私たち大学院生にとつて、チャーターの制度は非常にありがたい。とくに論文をつくるとき、チャーターは不可欠な存在だったと全員が感じていた。

アルバイトをしながら家賃が安い寮に住んでいた私費留学生に比べると、宿舍が確保できる国費留学生は、生活面や経済面でそれほど苦労をしていない。金さんは、苦笑いしながら部屋探しの門前払いを淡々と語ってくれた。というのも、前に住んでいた外国人がやうるさいタイプのため、大家さんは金さんの入居を拒否したという。外国人でも十人十色なので、日本人と外国人とのふれあいがあればあるほど、このような嫌な思いが少なくなるだろうと、金さんは思いを語った。

金さんによれば、韓国で見たりでは日本は一枚岩のイメージだったが、日本にきてみるといろいろな面をもつ社会であることがよくわかったという。ネダさんは、日本での経験はすべてがよかったと感じたという。ラクエルさんもそれに同感していた。留学生たちは、自分の人生にとつて日本での留学経験をプラスに思っている。

これから大学院にはいる外国人学生に、「積極性を出すこと、わからないとき素直にわからないといった方がいい(金さん)」、「たかさんの授業に出て日本人の友人をつくること」(ラクエルさん)というアドバイスも聞かれ

なると、どうやって言い訳をしづらいのかを考えることが、気がつかないうちに身につけていたように思います。それが、専修コースにきて、原理原則を直に感じて、あるいは立法に携わられた先生方から問題意識を教えていただく機会を得るうち、一生懸命に調べて確信がもてた場合には、革新的なことでも踏み出すべきだという気持ちになりました。

梅谷 大学院でやったのは、自分で問題をみつけて解答もみつけるということの繰り返しですから、そういったトレーニングは役に立ちます。ちゃんと調べてから結論を出すとい



司会 佐々木 敦 (ささき たけし)
大学院法学政治学研究科長・法学部長 (2000年3月まで)



石飛 雄高 (いしひら ゆたか)
1997年大学院法学政治学研究科専修コース修了(労働法)。現在、西日本旅客鉄道(株)人事部勤務。



梅谷 真人 (うめした まさと)
1999年大学院法学政治学研究科専修コース修了(無体財産法)。昨年、リサーチ・ペーパーを基に『データベースの法的保護』(信山社)を出版。現在、富士ゼロック(株)法務部勤務。



福田 宗孝 (ふくだ むねたか)
1999年大学院法学政治学研究科専修コース修了(商法)。現在、昭和シェル石油(株)法務室勤務。



ミレフスカ・ネダ
大学院薬学系研究科研究生
マケドニア
「4月から修士課程に進学」



金 宗植 (キム・ジョンシク)
大学院人文社会系研究科博士課程2年
韓国
「帰国後は研究者に」



ラクエル・ヒル
大学院総合文化研究科修士課程1年
オーストラリア
「日本語で修士論文に挑戦する」



司会 鄭 秀娥 (チャン・シヨウゼン)
大学院人文社会系研究科博士課程1年
台湾
「マスコミで活躍したい」

た。大学院で勉強して自国に戻る人たちは、エリート卵といえるのかもしれない。そして、自国と日本とのよい関係を築き上げる原動力になるはずである。留学生がどのように生活の不自由を乗り越えるかは、個々人の努力によるべきかもしれない。しかし、政策面で宿舍や奨学金の配慮などを含め、留学生を受け入れる体制が整備されることが、この座談会で語られた大きな問題である。

記事 鄭 秀娥(大学院人文社会系研究科社会情報学専攻博士課程)

教官の一週間

大学院
を重点とする大学

東京大学には四〇〇〇人を超える教官がいる。講義や研究、そして会議、ハードでユニークな生活ぶりを克明に記録。興味津々、知られざる先生たちの一週間とは……。

本学の教官はどのように時間を過ごしているのだろうか。同僚にとっても学外の方にとっても興味津々である。教官を便宜的に「研究科長(学部長)」「教授(理系)」「教授(文系)」「若手教官(文系)」「若手教官(理系)」「女性教官」にわけ、それぞれのカテゴリーごとに複数の教官に、一週間にわたり克明に記録していただいた。女性教官は文系・理系を問わず、助教・講師にお願いし、若手教官としては、マジョリティである文系では講師を、理系では助手にお願いした。

調査指針を説明すると、ウィークデイは特記することがない限り出勤時から帰宅時までを対象に、休日は自由記載とした。各教官の報告を、編集委員会が集計・整理した。したがって、ここに示されているのはリアリティに溢れたフィクションである。

総評すればどの教官も忙しく働いている。学部学生と大学院学生の教育に費やす時間、さらにはアドミニストレーションや本人の研究の時間は、ポストによる職務の違いと文系・理系の違いを反映している。

- A 全学・研究科(学部)研究室などの会議およびアドミニストレーション
- B 大学院学生の講義・実習・演習など(そのための準備を含む)
- C 大学院学生等の個別研究指導
- D 学部学生に対する講義・実習・演習など(そのための準備を含む)
- E 本人の研究
- F 学会など社会的な教育研究活動
- G 食事・休憩
- H 通勤

教授(文系)

①「弁当を食べながら英文誌の編集作業」/ ②「風邪気味だったので寝坊。でも、たまった仕事があり大学に出かけ、家に帰っても継続」
文系の教官のほうが、会議などのアドミニストレーションの時間が長い?



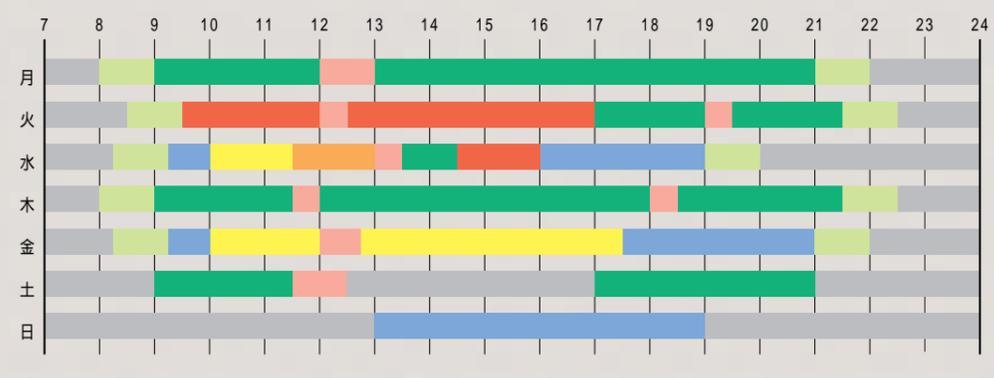
教授(理系)

①「昼食はおやつ時」/ ②「明日からの国際会議の準備で最後の追い込み」/ ③「学会後のノミ飲みニケーションはきわめて重要」
理系では、論文発表・シンポジストとして出席する学会や国際会議が頻繁



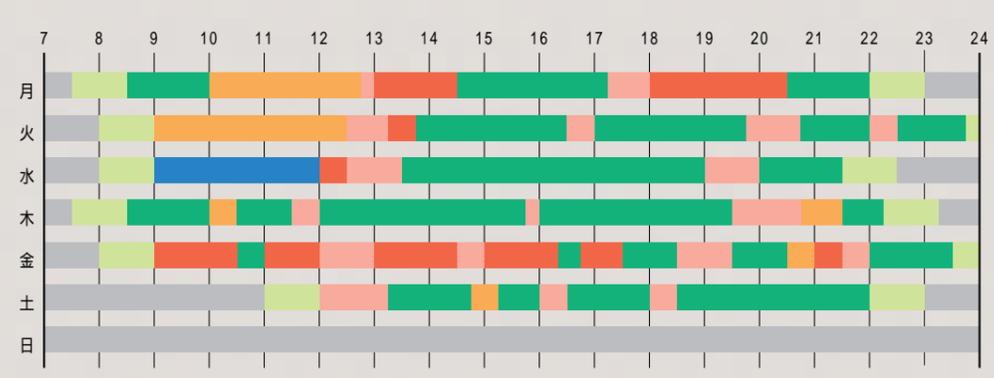
若手教官(文系)

①「月曜日は研究日」/ ②「ほとんど会議で暮れてしまった」/ ③「3コマの講義が終わりほっとする。夕方から、転動する同僚を囲んでワイワイガヤガヤ」
文系の教官にとっては、学部学生の教育がやはり大きな比重



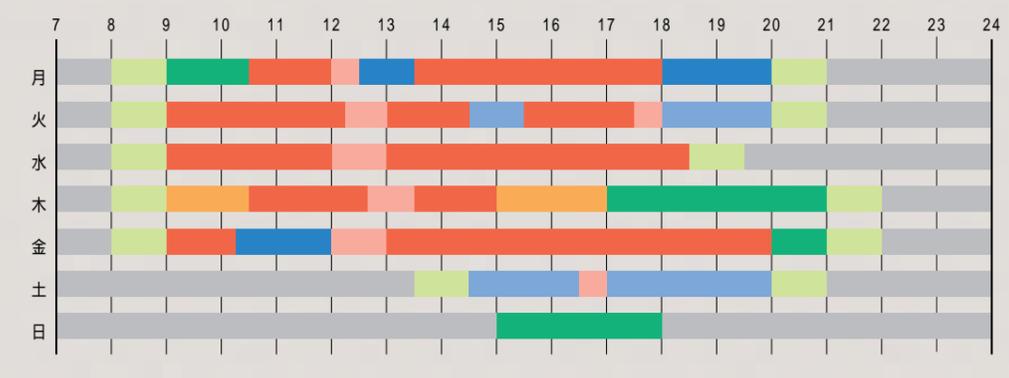
若手教官(理系)

①「忙しくて、昼食抜き」/ ②「昼過ぎに、教室員総出で掃除」/ ③「日曜日は終日休日」
理系の若手教官の場合、「本人の研究」と「大学院生の個別指導」とは紙一重、隣り合って実験しているのだから



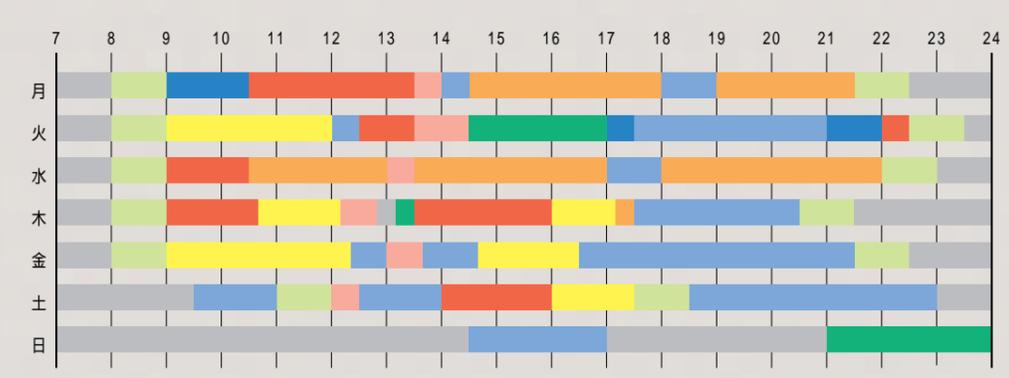
研究科長(学部長)

①「月曜日の午前だけは、せめて自分の時間のはずなのに」/ ②「久しぶりに学外で他大学の先生と会う会議で、気分転換」/ ③「家族との食事時間に間に合う」/ ④「犬と散歩し、午後の講演はすっきりと」
なんといってもアドミニストレーション



女性教官

①「夕方に大学院生と会ったのは、研究指導というより進路相談」/ ②「たまったメールの返事書きに追われる」/ ③「日曜日は特別なことがない限り出勤しませんが、家でちょっとは研究します」
夜や休日の大半の時間を、学会の仕事にささげる





社会情報研究所

Institute of Socio-Information and Communication Studies

情報社会のさまざまな現象やメディア・コミュニケーションの実態、メディア産業の構造や情報・言論にかんする法秩序、メディア文化や情報行動、災害情報などに、強い関心をもっています。

社会情報研究所は、昨年、前身の新聞研究所から数えて創立五周年を迎えました。ジャーナリズムやマス・メディアを対象とする日本で初のユニークな教育研究の場として発足しましたが、その当初は、「新聞理論」「報道」「論説」のわずか三部門からなっていました。その後、新聞や放送などマス・メディアの発展と、コンピュータや通信手段の急速な普及による高度情報社会の進展に対応できるように、社会情報全体を視野にいれる教育研究を展開してきました。

社会情報研究所通称「社情研」に名称を変えたのは平成四年で、現在の体制は「情報・メディア」「情報行動」「情報・社会」の三大部門からなり、研究分野は一に拡大されています。現在の社情研では、情報社会のさまざまな現象やメディア・コミュニケーションの実態、メディア産業の構造や情報・言論にかんする法秩序、メディア文化や情報行動、災害情報などに、強い関心をもっています。

社情研の大きな特徴は、人文社会科学の多様な学問分野の枠をこえた共同研究を推進していることです。研究スタッフには、社会学、歴史学、社会心理学、法学、政治学、経済学、メディア論などの専門家がそろっています。これらのスタッフは、所内や国内での共同研究はもちろん、最近では、アメリカ、イギリス、中国、韓国、オーストラリアなどの多くの研究者との国際共同研究で中心的な役割を果たしています。

東京大学には、平成二年度から、情報学環・学際情報学府という、文理融合を理念とする部局横断的な教育研究組織が設置されました。社情研は多くの学部や研究所とともに、この新しい組織に立ち上げの段階から積極的にかかわってきました。発足と同時に、社情研はスタッフを交代で派遣し、理系をはじめ

と多くの分野の研究者と共同し、東京大学における「情報学」の教育研究の充実に向け、その一翼を担うことを目指しています。

社情研は、教育活動も積極的に取り組んでいます。すべての教授・助教授は、大学院人文社会系研究科・社会文化専攻・社会情報学専門分野の教官を兼任しています。大学院教育にあたっては、学生を調査研究あるいは共同研究のプロジェクトの一員として参加させる、いわゆるオン・ザ・リサーチ・エデュケーションを早い時期から展開してきました。マス・コミュニケーションや情報化を研究するには、現場の動向に精通することが重要で、この現場との密接なつながりが、社情研のユニークな大学院教育の源になっています。

現在、修士課程二八名、博士課程三四名、外国人研究生二名、合計八二名の学生が在籍しています。また、社情研では研究成果の社会還元を重視するため、社会人選抜の制度を平成二年から導入しています。入学してくる学生は、修了すると、社会情報にかんする国内外の大学などの教育機関、あるいは社会の実践の場で、多彩な重要な役割を果たしています。

最後に、新聞研究所以来の歴史をもつ本研究所が行った企画を紹介しましょう。昨年一月から二月にかけて、総合研究博物館と共催した「ニュースの誕生」と題する展覧会です。五〇〇人もの入場者を集めたこの展覧会の目玉は、新聞研究所の小野秀雄・初代所長が収集した千数百点にのぼる瓦版や新聞錦絵でした。

メディアとコンピュータの普及・発展による社会の情報化はますます急速になり、とどまるどころをしましませぬ。情報化の進展は、社会のものになりました。情報化の進展は、社会と一人ひとりの人間に大きなインパクトを与

えつつあります。社情研は豊富な伝統を生かしつつ、情報化の進展に対応する教育研究とはなにかを常に考え、実践していくつもりです。

廣井 脩（ひろい・おさむ） 社会情報研究所所長

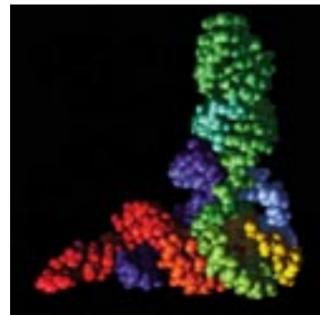
社情研は、社会情報に関するさまざまな現象について、総合的な視野に立つて研究を進めています。研究所のスタッフがカバーする研究領域は大変広いのですが、その概要を創立五周年記念事業の一環として、一般向けに「社会情報学Ⅰ・Ⅱ」（東京大学出版会）として刊行いたしました（上の写真）。



有りのそのまま 第13号



朝間山大やけの次第 天明3 1783 年



新領域創成科学研究科

Graduate School of Frontier Sciences

「物質」「エネルギー」「情報」「複雑系」「生命」「環境」という今後解決すべき問題領域をキーワードとして、超領域的にアカデミックに編成された各分野領域のスタッフより構成されています。

新領域創成科学研究科は一九九八年新設され、一九九九年に全面的に創設され、大学院学生を受け入れ、研究教育を始めたいばかりの大学院です。この研究科は、「物質」「エネルギー」「情報」「複雑系」「生命」「環境」という今後解決すべき問題領域をキーワードとして、超領域的にアカデミックに編成された各分野領域より構成されています。これらのキーワードは、いずれも既にその重要性が広く社会的に認知された未来科学の基幹ともいえる問題群です。そして同時に、個別的専門科学研究によつては解決することが不可能な領域であり、「学融合」としての超領域的な取り組みが必要とされるものです。

これらキーワードを基に、本研究科は三つの大きな研究系に分けられています。私たちが「基盤科学研究系」と呼んでおります。物質系専攻、先端エネルギー工学専攻、基盤情報学専攻、複雑理工学専攻は、約八〇名の教官から構成されています。先端生命科学専攻よりなる「先端生命科学系」は、教官約三〇名、環境学専攻よりなる「環境学研究系」は六〇名の教官から構成されます。このように本研究科は、新たな二一世紀の解決すべき問題領域を解明・解決するため、あえて既存の研究領域を超えていく、知の冒険を試みようとしています。それは私たちにとっては「学融合」という方法で、文字どおり科学・学問の新領域を創成していく大学院です。

おそらく東京大学が始まって以来はじめて全学部支援の態勢で作られました。すなわち、東京大学の法学部・経済学部・文学部・教養学部・工学部・理学部・農学部・薬学部等から参画した教授・助教授・助手等のスタッフは、実に一八〇名にもなります。

このような東京大学全体にとって新しい研究科を創設しようとする試みとその実現は、

実に長い歴史を経てきました。それは、私たちがまだ学生であった一九七〇年代初頭に、立川の米軍基地跡に第三のキャンパスを建設しようという構想に始まり、そして、一九九一年以降、東京大学が教育研究の基本を大学院に重点化しようとして、次第に戦略が定まったのと軌を同じくして本格化しました。

東京大学が二一世紀を担う我が国の研究教育の世界に向けての発信の空間として、千葉県柏市の米軍通信施設跡地三八ヘクタールを、本郷・駒場に続く、第三のキャンパスとして取得しました。この地にその理想を実現する一環として本研究科が創設されたのです。

東京大学が柏キャンパスでは成しがたい、新たな「知の冒険」を行うことです。この「知の冒険」を支える精神は、五つの内容によつて構成されています。

第一に、「未来開拓指向と学融合」です。現代社会の困難な問題群を解決するためには、既存の学問体系を本能的に組み替えるという作業を必要とします。私たちは、人類の未来を開拓することを目標に、学問体系を必要に応じて次々と組み替えていくという試みを基に教育と研究を行う道を選びました。

第二は、「ネットワーク指向と組織の開放性」です。研究教育の組織が肥大化して機動性を失わないように、多様・多層な学問的ネットワークを自らの内部と周辺に形成することを試みようとしています。東京大学の文系の社会科学研究所・東洋文化研究所・空間情報科学研究センター、理系から物性研究所・海洋研究所・気候システム研究センター・環境安全研究センター・人工物工学研究センター・高温プラズマ研究センター等が協力講座として参画することが計画されており、また教育プログラムには、法学部・経済学部・

教育学部・社会情報研究所が参加してあります。そして既に、いくつかの専攻では、外部の研究組織とのネットワーク型の研究が進められようとしております。

第三に、「戦略志向と組織の柔軟性」という理念です。限られた学術的資源の有効利用のためには、学術経営上、高度な戦略的判断が求められます。世界の先端的な学術研究の中で、今私たちがなにを引き受けるべきか、またそのための人や資金という学術的資源の配分や獲得はどうしたらよいか、ということを中心とした研究科の学術的組織運営を敏捷に、かつ効果的に行うためには、短期的な高度な戦略的判断が必要です。本研究はそのため、教育研究のプロジェクト主義を徹底的に採用することにしております。既に今日まで、専攻や大講座ユニットで一〇にもあまるプロジェクトが進められつつあります。新領域創成科学研究科はこのプロジェクト主義を徹底化することによって、先端的研究の自己革新と学融合を押し進めようとして決意しています。

最後に紹介したいことは、東京大学としてはほとんど実験の試みともいえませんが、柏キャンパスの理念と新領域創成科学研究科の理念をもとに、これを実現するため教授会の権限の大幅な委譲を受けた、意思決定組織としての「学術経営委員会」を組織いたしました。この組織は、時間の劣化を防ぐとともに、文字どおり、学術経営のための「戦略志向と組織の柔軟性」を実現する管理運営組織です。

さまざまに新しい試みを行う研究科が期待どおり実現するか、一〇年後、二〇年後にも新領域創成科学を生み出す研究科と言えるか、こうした検証に耐えるようにスタッフはがんばっております。ご声援ください。

似田員香門（にたがい・かもん） 新領域創成科学研究科科長

「MAPキナーゼ」との出会い

世界中の研究者に注目される“かわいいキナーゼ”の発見。
細胞増殖のメカニズムの解明に地道に取り組む後藤由季子先生を訪ねて。



後藤由季子助教授

今回の登場は、分子細胞生物学研究所助教授の後藤由季子先生です。後藤先生は人間の生死や病気にかかわる問題に、細胞増殖のメカニズム解明という観点からとりにくいでいらっしゃる。中でも大きな業績は、個々の細胞に増殖せよというシグナルを伝達するさい、重要な働きをする「MAPキナーゼ」という分子の発見に貢献されたことです。この発見は、正常細胞の増殖メカニズムという基礎的な研究はもちろんのこと、発癌や癌治療などの医学や薬学の研究にも大きな影響を与え、今では最も重要な分子の一つとして世界中の研究者の注目を浴びています。

最近、先生は細胞の生死の制御、アルツハイマー病にかかった脳の神経細胞が死んだり、逆にウイルスに感染した細胞や癌細胞が死ななくなるという、個体の生命を脅かす原因の解明にもとりにくいでいらっしゃいます。後藤先生の研究室を訪ね、サイエンスの魅力を語っていただきました。

Q MAPキナーゼを探しあてたときは、どんな感慨がありましたか。

A 細胞増殖の制御に重要な分子を見つけることをめざしてはいたんですが、思った以上に重要なものだったことが後からわかってきたんです。すごうれしかったですよ。毎日低温室にこもって、タンパクをとってやるという地味な作業をしていました。そうしてとった自分のかわいいキナーゼが、世の中に認められ広く知られるようになって、自分の子どもが偉く育っていくみたいで。たまたまMAPキナーゼを扱っているために、いろいろなことがわかってきて、それも毎週、毎月のように新しいことがわかってきましたから、すごラッキーですね。

Q そうはいつでも、いつもうまくいくものですか。

A たいていはそうではなく、うまくいかないことがほとんどです。(笑) その中で、うまくいったときは、「おーっ」と喜んでおかないと、後が辛いですから。

Q いつごろから、今の道を進もうと思われたのですか。

A もともとサイエンティストになるつもりはありませんでした。私が大学生のころはバブルの時代でしたから、私も金融の世界にはいると考えていました。ところが、大学4年から修士課程にかけて、実験を始めたら、本当におもしろかったんですよ。生物の仕組みが、感動をもたらすような精巧なメカニズムをもっていること、それを知ること自体がとても楽しかったんです。

忘れられないのは、修士1年生のとき自分で作業仮説をたて、それを検証する実験をして結論を出したのですが、そういう過程そのものに手ごたえがありました。自分でメカニズムを明らかにしているという実感です。結論自体は小さいものですが、自分にとってはすごく大きかったです。それと、自分の手で生物の仕組みを明らかにしていくだけでなく、他の研究者の論文を読んだり仕事ぶりを見て、感動できるんです。人によって作業仮説の立て方、検証の仕方がいろいろで、自然の仕組みという共通のことにかんして、いろいろなことを考えている人たちとのインタラクションがおもしろいんです。

Q 後藤先生はアメリカに留学なさっていますが、むこうでの研究環境は、日本とはちがいましたか。

A サイエンティストはサイエンスで勝負ですから、サイエンスをベースにみんな平等で実質的に競い合う雰囲気がありました。上下関係や所属などは日本ほど重要視されず、個人がどのような人物であるかがとても重視されるという印象をもちました。学生さんも、セミナーなどで臆して、教授に質問できないなどということはほとんどみかけませんでした。

Q 後続の人たちに、何を伝えたいとお考えですか。

A 自分も含め、これからのもっと若い人たちは、自分が本当に重要だと思ふことを追求すべきだろうと思います。世の中が速いテンポで変わっていき、流行に流されやすい時代ですが、あえて独自のものを拓いたり、また自分が信じることを押し進めることが、大事になってくるのではないのでしょうか。

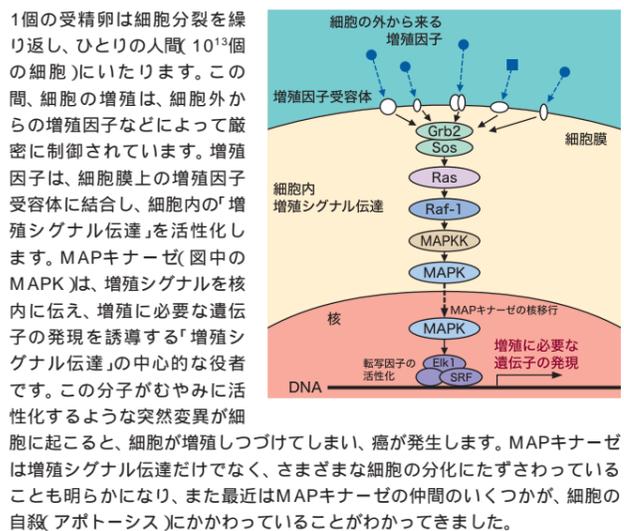
今、理系離れが進んでいるのは、本当にさびしいですね。こんなにすばらしい世界があるのに。もうひとつ、日本は応用技術のほうに目がいきすぎていますね。基礎に目をつぶっていきなり応用技術といっても、もっと基礎科学そのものに力をいれていかなければいけないと思うんです。

それにしても、自然を見てなんてすごいだらうと思うことって、ありますよね。そういうことを職業にできて、私、これ以上の幸せはないと思います。

研究内容を説明するとき、後藤先生は私の目を見つめて、むずかしい言葉を一切つかわず、しかし熱く語ってくださいました。1時間のインタビューの間、実によく目を細めて口を大きく開いて(失礼)ハハハと健康に笑われました。新幹線で1時間ほどのところに住むパートナーの寛大さに支えられているとおっしゃるのも、後藤先生の素顔です。

ノーベル賞が示すとおり、オリジナリティにあふれる研究は、東大ではみられないなどいわれてきましたが、東大にも、活力にあふれるびやかに研究できる環境があることを知りうれしくなりました。

インタビュー、記事 小室広佐子(大学院人文社会系研究科社会情報学専門分野修士課程)



1個の受精卵は細胞分裂を繰り返し、ひとりの人間(10¹³個の細胞)にいたります。この間、細胞の増殖は、細胞外からの増殖因子などによって厳密に制御されています。増殖因子は、細胞膜上の増殖因子受容体に結合し、細胞内の「増殖シグナル伝達」を活性化します。MAPキナーゼ(図中のMAPK)は、増殖シグナルを核内に伝え、増殖に必要な遺伝子の発現を誘導する「増殖シグナル伝達」の中心的な役者です。この分子がむやみに活性化するような突然変異が細胞に起こると、細胞が増殖しつづけてしまい、癌が発生します。MAPキナーゼは増殖シグナル伝達だけでなく、さまざまな細胞の分化にたずさわっていることも明らかになり、また最近MAPキナーゼの中間のいくつか、細胞の自殺(アポトーシス)にかかわっていることがわかってきました。



UT Forum 2000 in Boston

UTフォーラム2000イン・ボストン同行記

さる1月24日、米国のマサチューセッツ工科大学(MIT)ウオング講堂(Wong Auditorium)において、本学にとって画期的なイベントが開催された。このフォーラムは、日本学術振興会との共催により、本学の研究活動を海外に広く紹介することを目的としたもので、第1回目は、理学・工学系の研究紹介に重点がおかれた。



UTフォーラム2000会場風景

1月22日(土)ボストン・ローガン空港に降り立つと、眼前には真冬の光景が広がっていた。零下15度。米国で何年かを過ごした筆者にとっても、なかなか体験できない気温だ。フォーラムの「裏方」をつとめる筆者は、会場に向かいその構造などを脳裏に焼き付けた後、時差の克服を第一の義務と考え、ホテルに直行。

1月23日(日)午前中はリハーサル。会場には、講師陣が勢揃いしている。廣川信孝医学系研究科教授、浅島誠総合文化研究科教授、黒田玲子総合文化研究科教授、小柴昌俊名誉教授、安藤忠雄工学系研究科教授、河口洋一郎人工物工学研究センター教授。もう1人の講師の吉川弘之前総長は多忙で、リハーサルには不参加。夜は、フォーラムのために多大な貢献をくださった利根川進MIT教授のご自宅での晩餐会。ボストン郊外にある文字通りのお屋敷に、蓮實総長以下、東大からの参加者全員が招待された。3人のお子さまたちによるミニ・コンサート、プロのミュージシャンによる本格的な演奏、そしてフルコースのディナーと、まさに至れり尽くせりの歓待を受けた。

1月24日(月)フォーラム当日。何しろ初めての試みなので、300人収容の会場にどれくらい聴衆が訪れるのか、正直なところ不安がないわけではない。12時を回ったところから、講師を紹介してくだ

さるアメリカ側の教授陣が姿を見せる。M・W・カーシュナー・ハーバード大学教授、S・L・グラショウ同大学教授、中西香爾コロロンビア大学教授、M・ミンスキーMIT教授など、そのほとんどがノーベル賞受賞者たちである。12時半、河口教授のコンピュータ・グラフィックの上演開始。それと相前後するように、観客が増えはじめ、客席のほぼ8割は埋まる。まずは安堵のため息。

午後1時、高田康成総合文化研究科教授の司会でフォーラム開始。C・ヴェストMIT学長の歓迎の辞にひきつづき、蓮實総長の挨拶。そして、いよいよ2部構成の講演がはじまる。後半のセッションになると、客席は満杯状態になり、通路に立見の列ができるまでになった。フォーラムは成功裏のうちに終了。夜には、日本から持参した酒樽にニューヨークから届けられた日本酒の鏡開きつきのパーティ。盛り上がった。

晩餐会のあいだじゅう、本フォーラムについての賞賛の言葉をいただいた。「発信」がキーワードだ。講師の先生方の研究を、東京大学として世界に向かって「発信」した本フォーラムの歴史的かつ革新的な意義は、「裏方」の筆者にさえひしひしと伝わってきた。疲れたが、貴重な体験だった。

内野 儀(うちの・ただし 大学院総合文化研究科助教授)



UTフォーラム2000パンフレット

- Nobutaka Hirokawa:** "How do the Cells Transport Organelles and Protein Complexes?"
- Makoto Asashima:** "In Vitro Control of Organogenesis and Gene Expressions in Animal Development"
- Reiko Kuroda:** "Chirality and Achirality in Molecular Processes"
- Masatoshi Koshiba:** "Observational Neutrino Astrophysics"
- Hiroyuki Yoshikawa:** "Design - Artifacts - Environment"
- Tadao Ando:** "From Architecture to Cities: Aiming for Public Spaces"
- Yoichiro Kawaguchi:** "Life - Survival - Art"



本号の編集にあたっては、学内はもとより学外の方々からも多くのご助力をいただきました。写真の使用に関しては、東京大学アルバム編集会をはじめ多くの方々にご協力いただきました。

編集発行 東京大学広報委員会

- 編集委員 大塚柳太郎
大学院医学系研究科教授
- 谷口将紀
大学院法学政治学研究科助教授
- 内野儀
大学院総合文化研究科助教授
- 鈴木眞理
大学院教育学研究科助教授
- 仁科博史
大学院薬学系研究科助教授
- 小森田秋夫
社会科学研究所教授
- 柳澤幸雄
大学院新領域創成科学研究科教授
- 及川雅勝
企画調整官

印刷・製本 印象社
発行日 平成12年3月31日

お問い合わせ先
東京大学総務部総務課広報室
〒113-8654
東京都文京区本郷7丁目3番1号
電話 03-3811-3393
FAX 03-3816-3913
E-mail<kouhou@adm.u-tokyo.ac.jp>
URL<http://www.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>



総合図書館前の一対のクスノキ
(*Cinnamomum camphora*,
クスノキ科)

下 総合図書館前の一対のクスノキのうち左手の樹

三四郎池西側のケヤキ並木

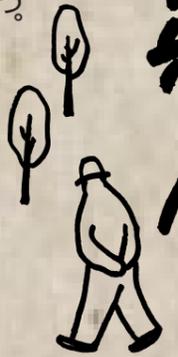


医学部本館と薬学部の間
ケヤキ
(*Zelkova serrata*, ニレ科)

下 ケヤキの枝ぶり

キャンパス散歩

ふだん何気なく行き交うキャンパス。その豊かな環境に眼を向けると、見過ごしがちな自然に出会う。



散歩人



大場秀章

キャンパス樹木園②

ケヤキの枝は弓状にゆるやかに反っている。その樹姿に優美なものを感ずるのは私だけだろうか。枝の分岐の無限に近い変化も見ていて飽きない。とくに冬は枝の細部まで詳細に眺望できる。細部でのかくも多様な分枝にもかわらせず、樹姿が一目でケヤキとわかるのはなぜだろう。

キャンパスに暮らす私が、冬の寒さが緩んできたことを知るのもケヤキをおしてのことが多い。開葉前に冬芽が膨らむのだが、このときケヤキの枝々はうっすらと紫色をおびるからだ。

冬から夏、そして再び冬へと循環する一年の気候変化の中間に春と秋という季節を意識させるのは、温帯地域の植物の振舞いといつてよい。冬に落葉した木々に新葉が展開し、見る見る樹冠が緑に色づいていく。これをあたかも通奏低音のように、いろいろな生き物が活動の息吹を協奏していく。そして、つぎの落葉の季節を迎えるまでキャンパスに四季の移ろいを知らせてくれる。

ところで木には、一年中葉が繁っている常緑樹、一定期間は落葉して過ごす落葉樹がある。落葉樹には、寒冷期に落葉する夏緑樹と

乾燥期に落葉する雨緑樹があるが、本郷キャンパスに見るのは夏緑樹である。ケヤキはもと武蔵野に多い木であつたらしい。その名残りのように、寺社の境内や農家の屋敷林にケヤキの大木を見ることができ、

本郷キャンパスでもつと数多い木はケヤキで、クスノキとイチチョウがそれにつぐ。とくに育徳園の総合図書館側に沿う通り、それに工学部や経済学部以南の開東大震災後に建築された建物の周囲にはケヤキが多い。生長の速いケヤキは、その重厚な建物を凌駕しつしりと葉を繁らせ、蝉などの鳴き声が響き合う夏は林間にいるような気分さえ覚える。

ケヤキがすっかり落葉した冬でも、常緑樹のクスノキの樹冠には青々とした葉が繁る。本郷キャンパスではクスノキは意識的に植樹されたらしい。それというのも、大講堂安田講堂と総合図書館前の広場に左右対をなして植えられているからだ。ケヤキの枝が弓状に反るのに対してクスノキの枝は直状かわずかに湾曲するため、樹姿がケヤキとはだいぶちがう。クスノキも生長の速いことで有名で、古来から建築や彫刻に重用されてきた。夏緑樹の存在とテリケートな季節変化は、緑一色の夏には気づかない冬から早春のキャンパス散歩の楽しみを幾倍にも増してくれ

る。そんな散歩の折、常緑樹と夏緑樹が混ざったキャンパスの植生が東京大学そのものの存在を象徴しているとふつと思つたことがある。温帯は冬に落葉する夏緑樹が発達することを特徴としているが、東アジアだけに照葉樹林という特異な常緑樹林が存在している。夏緑樹のケヤキと常緑樹のクスノキがキャンパスの主要樹になつているのは、偶然而なる業だけではあるまい。

おおは・ひであき(総合研究博物館教授)

▶展示

総合研究博物館企画展示デジタルミュージアム2000
 3月1日(水)～4月28日(金) 10:00～17:00(入館は16:30まで、月曜日休館) 総合研究博物館展示ホール
 問い合わせ:総合研究博物館庶務掛
 ☎03-5841-8452



21世紀夢の技術展
 7月21日(金)～8月6日(日) 東京ビッグサイト
 問い合わせ:農学系総務課
 ☎03-5841-5004

▶公開講座

第93回 平成12年・春季 東京大学公開講座
 テーマ「相性(あいしょう)」
 4月8日(土) 15日(土) 22日(土) 5月13日(土) 20日(土) 東京大学大講堂 安田講堂
 問い合わせ:財団法人 東京大学総合研究会
 ☎03-3815-8345

▶講演会

東大病院にこここボランティア講演会第1回
 「病院ボランティア活動の輪を広げよう」
 講師 長谷川純子 聖路加国際病院ボランティアグループ・リーダー)
 5月15日(月) 17:30～19:00 / 医学部附属病院第一会議室 管理・研究棟二階)
 問い合わせ:医学部附属病院医事課 米山英美子
 ☎03-5800-8778

東大病院にこここボランティア講演会第2回
 「介護保険の光と影」
 講師 田城孝雄 医学部附属病院医療社会福祉部)
 7月18日(火) 17:30～19:00 / 医学部附属病院第一会議室 管理・研究棟二階)
 問い合わせ:医学部附属病院医事課 米山英美子
 ☎03-5800-8778

▶一般公開

電気系3専攻(学科)研究公開
 7月5日(水) 電気系3専攻(学科)研究室
 問い合わせ:URL <http://www.ee.t.u-tokyo.ac.jp/OpenHouse2000.html>
 天文学教育研究センター木曾観測所特別公開
 8月5日(土) 展示と解説 10:00～17:00 天体観望会 19:30～21:00(雨天中止) 木曾観測所および太陽風観測所



問い合わせ:木曾観測所
 ☎0264-52-3360
 URL http://www.ioas.u-tokyo.ac.jp/kiso_obs/

▶シンポジウムなど

公開セミナー「森林のしくみと人間の関わり」
 5月中旬 / 北海道演習林
 問い合わせ:北海道演習林庶務掛
 ☎0167-42-2111
 公開セミナー「奥秩父の自然と人のかかわり」
 5月下旬 / 秩父演習林
 問い合わせ:秩父演習林
 ☎0494-22-0272
 医科学研究所発表会
 5月31日(水) 6月1日(木) 医学部附属研究所講堂
 アムジェンホール、クレストホール
 問い合わせ:医科学研究所管理課研究助成掛
 ☎03-5449-5205

創立シンポジウム
 6月1日(木) 医学部附属研究所講堂
 問い合わせ:医科学研究所管理課研究助成掛
 ☎03-5449-5205
 農学部公開セミナー
 6月上旬 / 農学部1号館
 問い合わせ:農学系総務課広報情報処理掛
 ☎03-5841-5484
 多体系の強相関現象(原子核物理と物性物理の横断)シンポジウム
 科学シンポジウム
 6月26日(月)～29日(木) 日光
 6月30日(金) 山上会館
 参加希望者は組織委員会までお問い合わせ下さい。
 問い合わせ:シンポジウム組織委員会 代表 酒井英行
 ☎03-5841-4237
 第15回工学部・工学系研究科技術発表会
 7月21日(金) 10:00～ / 工学部14号館141講義室
 問い合わせ:工学部・工学系研究科技術発表会実行委員会

五月祭

5月26日(金)～5月28日(日)
 (5月26日は学内公開です。)
 東京大学本郷キャンパス
 文京区本郷7-3-1

第93回(平成12年・春季) 東京大学公開講座
 テーマ「相性(あいしょう)」

プログラム

区分	時間	講義題目	所属・官職	氏名	専攻
第1日 4月8日(土)	13:30～13:40	開講の挨拶	企画委員長(農学生命科学研究科長) 林良博		
	13:40～15:00	薬と人の相性	薬学系研究科教授	杉山雄一	生命薬学
	15:20～16:40	相性・そして恋心 -ギリシャ・ローマ文学の場合-	人文社会科学系研究科教授	逸身喜一郎	西洋古典学
第2日 4月15日(土)	13:30～14:50	臓器移植と相性	医学系研究科教授	幕内雅敏	外科学
	15:10～16:30	土と作物の相性	農学生命科学研究科教授	松本聰	土壌園科学
第3日 4月22日(土)	13:30～14:50	詩人とその妻 -光太郎・智恵子/光晴・三千代-	総合文化研究科助教授	今橋映子	比較文学・比較文化
	15:10～16:30	相性のよい人工物を求めて -ロボットとバーチャルリアリティの現在-	工学系研究科教授	館暉	計数工学
第4日 5月13日(土)	13:30～14:50	人と会社の相性 -ぬるま湯的体質を探る-	経済学系研究科教授	高橋伸夫	経営学
	15:10～16:30	異なる物質間の相性 -界面で電子の動きを操る-	理学系研究科教授	西原寛	化学
第5日 5月20日(土)	13:30～14:50	スギと日本人の相性	農学生命科学研究科教授	古田公人	森林科学
	15:10～16:30	教師と子どもの相性	教育学系研究科教授	近藤邦夫	学校臨床心理学
	16:30～16:40	開講の挨拶	東京大学総長 蓮實重彦		

* 止むを得ない事情によりプログラムを変更する場合があります。(主催:財団法人東京大学総合研究会)